

「自由に処分できる時間」と未来社会論

——マルクスの探究の足跡をたどる(レジメ)

2024年6月25日 志位 和夫

- 一、「人間の自由で全面的な発展」——マルクス、エンゲルスが終生求め続けた大テーマ
- 二、初期の探究——『ドイツ・イデオロギー』(1845～46年)、分業の廃止
- 三、経済学の本格研究の開始のなかで——ディルク(匿名)のパンフレットに出会う
- 四、『1857～58年草稿』——「自由に処分できる時間と未来社会論」の最初の表現
社会の発展は、時間の節約にかかっている
「自由に処分できる時間」と搾取の関連、未来社会論
 - ・「自由に処分できる時間」の創出は、科学、芸術などの生産のための時間の創出
 - ・資本家は自由な時間、すなわち文明を、横領する
 - ・搾取がなくなれば、「自由に処分できる時間」が万人のものとなる
 - ・「自由な時間」の増大は、持ち手を違った主体に転化し、最大の生産力となる
- 五、『1861～63年草稿』——「自由に処分できる時間と未来社会論」の本格的発展
「搾取によって奪われているものは何か」についての本格的考察
「自由に処分できる時間」は真の富であり、自由な発展の場を与える
『草稿集』の未来社会論は、『資本論』の未来社会論を全面的に準備するものとなった
- 六、『賃金、価格および利潤』(1865年)——時間は人間の発達の間である
- 七、『資本論』第三部(1865年執筆)——剰余労働の総括と未来社会論
搾取社会における剰余労働の問題の総括
未来社会の本論——「真の自由の国」と「必然性の国」
- 八、『資本論』第一部・完成稿(1866～67年執筆)——第三部の叙述が引き継がれる
「自由に処分できる時間」という規定が、さまざまな形で登場する
社会主義・共産主義になると、どうして労働時間の抜本的短縮が可能になるか
- 九、マルクスの提起を現代の労働運動の指針として
- 十、むすびに——戦略的課題として、「共産主義と自由」を学び、広く語り合おう